

第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

報告書資料 一般-85

学校名・団体名	鳥取市立鹿野小学校
HPアドレス	http://cmsweb2.torikyo.ed.jp/sikano-e/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	魅力ある単元づくりを通して、みんながつながり最後までたくましく学ぶ鹿野っ子の育成
<p>〈活動・研究の意義，目的〉</p> <p>今日の教育のなかで、学力の二極化と学習の目的意識の希薄化は全国的に語られる問題である。本校の実態はどうか。昨年度の本校職員による「研究レポート」から、関連する記述を拾ってみた。そこから、以下のようなものが課題として浮かび上がってきた。</p> <ul style="list-style-type: none">・昨年度の学力調査では思考を伴う発展的な問題に弱かった。空白はなくどの子も自分なりに考えていたが正答率は低かったので、発展的な問題をもっとさせ、思考を深める練習をさせていきたい。・児童を見るとその時間の「問題」が解ければ、あるいは答えが出ればよいと誤解してしまっている可能性がある。その時間で触れるべき学問的価値を意識したい。・時間をかけて考えることを厭わない児童，難しい問題に意気揚々とチャレンジする児童らを育てていきたい。 <p>このように、本校職員も、児童の課題として、学力が定着していない児童の固定化，難しい問題や発展的な問題への挑戦意欲を挙げている。それに関連して、教師主導の授業からの脱却を目指したいという本校職員の共通の問題意識も明らかになった。</p> <p>このことから、『全ての児童が最後まであきらめずに学習に参加できる授業を構築すること』そのために、『言語活動を重視した魅力ある課題を設定できるような教師の専門性を高めること』が大きな柱として、研究テーマを設定した。</p>	

〈活動・研究報告〉

1 本校の挑戦「全員参加の学習」

児童にチャレンジを求めることは、教師自身も何かに挑戦することである。そこで、今年度は各自「単元構想表を掲示する」とか「トーンを下げて授業をする」などの挑戦を掲げ、全員参加の学習を目指した。

誰もが主役として学び合う学習とは、子どもたちが学ぶべき対象（教材）に出会い、「分からない」「難しい」ということを出発点として、聴き合い、話し合うことを通して「できた」「分かった」「学んでよかった」と感じられることである。それは、決して教師が教え込むのではなく、他者とのかわりのなかから自発的に生まれてくるものと言い換えることができる。ただし、学び合っていれば何でもよいわけではないというのは国語科も同じである。国語科では何を教えたらいかが分からないという話をよく聞くが、教えるべきことは決まっている。どこを読むか、どう書くべきか、どう話すべきか、そこで使うべき学習用語は何かなどを系統的にきちんと教える必要がある。それを言語活動を通して、指導していく方法を探るのが本研究の要諦である。こうした学びを全員参加で行うには授業をどのようにコーディネートしたらよいかを研修すべく、具体的な方策を各研究部に分かれて探ることにした。

2 校内研究の報告

身近な子どもたち、身近な同僚こそ、学びの対象である。そこで、いかなる研究を進めるにあっても、目の前の児童や、隣の学級、隣の学年から学ぶことを基本とすることを確認した。そこで何が行われているか、その学級の担任は何に挑戦しているかを知り、励まし高め合うことこそ、お互いの授業改善につながる。そこで『開かれた学級・みんなで高めあう授業』をスローガンに全体研修やミニ研修を企画した。

(1) 研究教科 国語

(2) 全学級の公開授業の実施

学級を開く、全職員で全校児童を見るという意図で、原則水曜 5 時間目は授業公開を入れた。各指導者の負担を減らし、児童を中心に観る研究会にするため、「指導案にはねらいと簡単な流れのみ書く」とすることで、指導者は教材研究に専念できた。ただし、教師個々の「チャレンジ」を重視するため、何に挑戦しているかが明確になるように書くこととした。公開後は簡単な研究会を開き、子どもの学びが繋がったところ、逆にとぎれたところを中心に感想を伝えるようにした。

(3) 部会研の充実

以下の 3 つの部に分かれて研究を行った。

○開かれた授業づくり研究部・・・授業を開き、教師同士が学び合えるシステムについて提案した。

○つきたい力の系統表研究部・・・新しい教科書の教材配列を研究し「つきたい力系統表」を作成した。

○言語活動研究部・・・単元に合った言語活動例を集め、言語活動例一覧を作成した。

(4) 外部講師の積極的活用

8 月には筑波大学附属小学校の二瓶弘行氏を招いて、物語文の指導について研修した。10 月には鳥取大学准教授 小笠原拓氏を招いて、単元学習と言語活動の現状について、指導をいただいた。9 月と 2 月には元宝塚小学校校長小畑公志郎氏を招いて、児童の学びを丹念に見取ることについて指導をいただき、個々の学級についてカンファレンスを行っていただいた。1 月に神戸大学名誉教授 浜本純逸氏を招いて、国語科で育てたい思考力について研修した。

(5) 『研究便り』の発行

月に 2 回程度、『研究便り』を発行し、研究の方向性について共通理解した。全号を紹介することはできないので、現時点までの主なテーマのみ記載する。

- ・学級開きをしよう
- ・物語文の書き込みについて
- ・情景を思い浮かべるって？
- ・授業のデザイン
- ・物語文の最初に何をする？
- ・聴き合う関係を育む授業づくり
- ・説明文の教材研究
- ・先輩の先生方から学ぶこと

3 研究の成果と課題

つけたい力の系統表研究部で作成した「つけたい力系統表」は、縦軸に、「学習指導要領に準拠した目標」「育てたい読みの力」「押えるべき学習用語」「考えられる言語活動」を記載し、横軸を学年に区切って、A3版1枚で全体が俯瞰できるようにしたものである。これを片手に教材研究をしたり、発問作成の参考にしたりする職員も多く、実りあるものができた。鳥取市の小学校教育研究会の研修にて提案したところ、来年度の中国地区国語教育研究大会の発表の一部として参考にしたいとの申し出があるなど、独りよがりにならない系統表を作成することができたと考えている。

児童に関してであるが、全児童対象に行っている学校生活のふり返りアンケートでは、『国語の学習が好きだ』と答えた児童の割合がやや高くなった。また、児童の挑戦意欲が国語科の学習以外にも少しずつ広がっているという成果も読み取れる。

また、児童の意欲喚起が学習効果を上げるうえでかなり大きなウエイトを占めることも公開研究会の参加者からの指摘で分かってきた。そのためには、「つけたい力を明確にする」「児童にとってのゴールを明確にする」「教師は教科間のねらいを整理する」ということが大切であることを確認した。

一方、課題としては、以下の点が考えられる。先の項で「学習効果」について触れたが、指導事項を系統化して、それを、言語活動として学習のゴールを意識した単元を構想した場合とそうでない場合の「効果」や「学力」の比較が客観的に検討しにくいということである。これは、国語科における学力とは何かという大きなテーマに対する課題と、個人情報保護の観点からみて、追跡調査がしにくいという課題を含んでいる。ただし、本校の児童のほとんどが、同一中学に進学することや、今後、小中一貫校への移行が決定されていることを考えると、追跡調査や中学校の教師との連携に大きな可能性を残すものである。

もう一点は以下のことである。冒頭に、児童にチャレンジを求めることは、教師自身も何かに挑戦することである、と述べたが、学級を開き、自分の授業についての評価を真摯に受け止めるということにどうしても消極的になる職員が少なからず見られることである。中核となる教員が自ら授業を開き、うまくいかない場面もさらしながら、泥臭く研究を進めることで、さらなる同僚性の構築が望めると考えている。

さらに、今後、研究すべきこととして、つけたい力に沿った学習用語の系統化を進め、児童の実態や学校、地域の実態に応じて随時、入れ替えたり加除修正していったりすることが考えられる。



[鳥の劇場での詩の朗読]



[公開授業の一コマ]